平成十九年度

四月十日

生徒らの思はぬ見舞桜咲く

花衣着ればナースも乙女へと

退院の喜び新た風薫る

少年の面影残し入社式

四月十三日

白衣から開放ナース花人へ

平成の我は綱吉四月馬鹿

四月十六日

藤の香の下で口づけ尚甘き

ひとひねりの俳句応募

色の俳句応募

犬の俳句応募

四月十八日

草餅や味良し色良し香り良し

四月十九日

退院の喜び飲み干すコップ酒

バーのママ気をつけてねとつぐお酒

四月二十三日

冷麦につゆにしみ込む君の愛

仏壇へ藤の香りを持ち帰り

昭和の日ミスター長嶋知らぬ子ら

四月二十五日

何よりのナースの笑みが良き薬

介護士と相合傘や梅雨の杜

片手に傘片手に赤福梅雨の午後

五月一日

子どもの日甥は大きく我小さく

夏帽子かぶれば十は若くなり

五月七日

何か変夏におでんを買う時代

涼しさと花を求めて川柳植物園

来てみれば地下には地下の暑さかな

沿線に新茶の香り届きさう

五月八日

ブランコや少子化問題揺れており

介護士が冷ましてくれた熱帯夜

五月十日

母の日に母と思へぬ顔もあり

五月十五日

良き夢の続き見たくて昼寝かな

夏場所やいつかは俳句の横綱に

五月十六日

ＳＬの煙想ふや雲の峰

初電車目覚まし代わりや明けやすし

交通文化展応募

交通文化展応募

五月十八日

亡き友の声聞こえそう梅雨深し

五月二十日

良く通る友の歌声若葉風

竹馬をたくみに乗る子若葉風

夕涼み君と居たなら尚長く

いつの間に友は孫でき夏便り

五月二十八日

歌声も日焼けをしたるコンサート

子と遊ぶお化け屋敷に涼求め

校庭の二宮像も汗の顔

六月四日

川の音太鼓に変り梅雨の空

六月五日

気掛かりな友の手術や梅雨の午後

井戸こげば涼と昔が溢れ出す

六月十日

村中を染まりしものや若葉風

三千風がくれし青空梅雨晴間

弁当も空気もうまし山茂る

六月十一日

三千風ならどう詠むだろう雲の峰

団扇では冷ませぬものや恋心
シェーバーの音も滑らか夏の午後

六月十二日

青田道抜けて三千風郷へ行く
時の日や芭蕉と三千風劇で会ふ
かき氷のれんの赤が客誘ふ
雷におびえし君のいとしさよ

六月十五日

コーヒーに入れこむ涼と君の愛
下校の子傘もおもちゃと梅雨深し

六月二十一日

らっきょうや母の苦労の匂いして

気まぐれな君の心や七変化

七月二日

カメラマン今日は暑さも撮りにけり

天の川二人の願いただ一つ

七月九日

梅雨晴れ間心を癒すピアノの音

七月十二日

燃え上がれ花火のごとくこの恋も

爆笑の友の演劇暑気払い

誕生日一人うなぎで祝おうか
赤い糸をたぐって伊勢に夏の旅

七月十八日

祇園祭屋台のお面雨に泣く
夏台風になぜにデートの

七月二十日

扇風機二人の会話弾ませる

七月二十三日

風のみが遊ぶ校庭夏休み
帰省の子お国の訛り消へにけり
炎天も気にせず幼児はしゃぎけり

七月二十四日

若者と涼風浴びて外食へ

こだわりは秘伝のたれや冷し麺

退院の友に南風心地良く

炎天も気にせず幼児はしゃぎけり＋

八月二日

汗流し乙女が直す車いす

八月八日

お見合いに色添へ味添へ夏料理

子どもらに語り続けたし原爆忌

お見合いの破談の電話稲光

無いものか乙女心を引く香水

昼寝醒めやっぱり君は彼のもの

八月二十一日

子どもらとなぞなぞ解きて汗の顔

秋の雲平和の良さを知っており

虫かごの出たい出たいとかぶと虫

温度計秋を忘れて上がりけり

もてなしは友の笑顔と涼新た

農公園牛肉氷菓名物に

地下街に人の集まり残暑かな

甘党の我に義妹冷へし桃

いつまでも我を襲うか蚊の名残

秋の声聞へてこない此の温度

帰省の子昔も今もあの口調

八月二十八日

扇風機二人の会話弾ませる

乙女らが福祉体験夏休み

思ひ出をくれし乙女や星月夜

格闘家残暑をエイと投げ飛ばす

八月三十日

浪花路を日の丸駆ける秋暑し

恋というクロスワードを解く夜長

九月五日

秋の風アシカの鳴き声海までも

神無月神馬が留守の役となり

月食は宇宙のマジック秋の夜

九月十一日

鰯雲今日の夕餉にしたいほど

介護士の愛で枝豆弾けけり

九月十九日

秋風に都に友の歌流れ

食満たす旬心満たす秋の志摩

いつ来ても敬老日なり

秋の蝶なにを願いに伊勢の杜

いいもんだ男二人の秋の旅

爽やかや電車に揺られ愛に揺れ

名も知らぬあの花見つめ秋の旅

初林檎婦人の愛でなお甘く

十月一日

できるなら君にあげたい今日の月

運動会風がなびかす万国旗

山里に響く歓声運動会

十月十四日

招かれて思はぬ旅や秋の志摩

紅葉にアシカの眼赤く染め

マニュキアも秋の色になり乙女かな

まだ浜の匂い残しサンマ食べ

十月十五日

爽やかやアシカにキスをされちゃった

秋風や赤福看板色あせし

ドライバー愛で秋雨止めにけり

テレビから友の歌声聞く夜長

十月十六日

秋の夜十七文字を追ひ求め

十月二十四日

思い出もたたんでおりし秋扇

十月二十五日

交番にお金届ける子爽やかに

十月二十六日

爽やかや親子の愛がテレビより＋

十月三十一日

小公園お前も散歩か秋の蝶

十一月五日

着ぐるみのパンダに人気秋祭

名物が次々消へる伊勢の冬

十一月五日

若者が伊勢路をかける冬の午後

ロックより演歌がにあう冬の夜

十一月九日

光より影の生き方薮柑子　光の一句応募　佳作

初日の出光集めて伊勢の海　光の一句応募

十一月十日

紅葉の光に包まれドライブを

憧れの人と握手や冬温くし　光の一句応募

十一月十四日

手袋ぬぎいとしき君と握手かな

十一月十五日

シャッターにこの成長を撮る七五三

十一月十七日

冬空に歌声響く文化祭

葱刻み時も刻みてうどん煮る

十一月二十五日

世界一めざす選手や息白く

木の葉髪歳をとらないサザエさん

十二月二日

アルバムに思ひ出増える年の暮れ

だんだんと演歌消へゆく年忘

十二月六日

冬空に一直線の飛行雲

校庭に色鮮やかな冬紅葉

十二月七日

見てくれと自慢げに舞ふやっこ凧

十二月九日

行く道の残る紅葉が目をうばふ

手袋や指は何故十本あるのだろう

十二月十四日

初雪に思はず子らのはしゃぎ声

十二月十八日

借りたもの返せぬままに年暮れる

一病も反と考え年暮れる

俳句道まだまだ長し年の暮れ

偽りのしみじみ悲し年の暮れ

友の手を借りて散髪年向かふ

十二月二十六日

年賀状消す名に少し未練あり

十二月二十八日

よちよちの甥も頼もし成人式

十二月三十日

大掃除すれば出てきし探し物

除夜の鐘九十位で寝てしまい

一月四日

初旅は人また人の伊勢路へと

初旅の良き疲れ残しぐっすりと

介護士に五体預けて初湯へと

一月七日

偽りの墨字悲しき年の暮

春ですと優しき風が戸をたたく

一月八日

句の縁で思はぬ人と初電話

書初の心の一字心込め

一月十日

コロッケも店にこだわり初買いを

原油高気にしてストーブあたたまぬ

一月十五日

けんかして元の鞘へと雪解かな

おらが村雪が恋人のようなもの

雪解けや二人の仲は解けません

第7回雪のラブレター応募

第7回雪のラブレター応募

第7回雪のラブレター応募

一月十六日

成人式昭和最後のクラス会

初場所や異国の力士が客さらう

一月二十一日

風花に幼な心を呼び戻す

とこずれに負けずと食べる寒卵

一月二十二日

雪見酒酌み交う君といつまでも

一月二十五日

節分や鬼を演じる父優し

俳句という恋人出来しバレンタイン

口元に春つげたる恵方巻き

記念樹のさぞや大木卒業期

一月三十一日

赤福の復活したる伊勢の春

二月一日

友に孫生まれて嬉し春来る

二月五日

遠近に響く球音春来る

二月六日

祝ひ事ありし恩師に春の風

明け易し名物餅や客の列

石垣の貌も微笑む春の風

球春やイチローめざす子の素振り

介護士の白き心や春の雪

一望を真白に染し春の雪

二月十二日

介護士と一夜を共に朧月

マネキンも晴れ着姿の午祭

二月十九日

髪切って気分新たに春迎ふ

二月二十日

日脚伸ぶ許せる帰路の回り道

息かけて夢も飛ばすやシャボン玉

二月二十一日

傘を差す手も軽がると春の雨

肩こりは三代譲り菜種梅雨

三月二日

春雷や五十男がマニキュアを

三月三日

ネクタイに決意もしめて入社式

三月五日

ボタン見て思ひ出過る卒業期

三月六日

春の風人の温もり陽のぬくみ

三月七日

調理師の仕事弾みし水温む

三月九日

春風に乗りて軽やか友の歌

三月十二日

コンサート成功祝ひし山笑ふ

三月十三日

マスクしてティシュ片手に薬局へ

悲しさと嬉しさ踏み締めこの道を

三月十八日

国と国歌で結びし春の午後

これとなくデート日和りや春の午後

花満開をれどわ恋三分咲

愛といふ色をしはえて虹八色

三月十九日

偽りのこの世に染まり四月馬鹿

三月二十二日

菜の花の香りも入れて昼餉かな

お彼岸や久の赤福仏壇へ

三月二十五日

寅さんの顔浮かびをり草だんご

三月二十六日

嫌な事流してくれし花の雨

こだはりは栄養ドリンクイチゴ味

三月三十一日

戦火の頃忘れてならぬ終戦日

胸の火事君は綺麗な放火犯

山眠る起こしてならぬ消防署

花冷やごひいきチーム連敗中